

<講義の流れ>

1. 講義が始まる前にテキスト『小学校英語教育の基礎知識』(村野井仁, 大修館書店(生協にて購入してください))の第1章(pp.12-29)を前もって読んでおきます。

2. 講義は40分です。(Zoomの無料での使用が40分です。それを超えると有料となるため、とりあえず40分で講義を行います。)

3. Zoomにはチャット機能があります。読んだ感想を短くコメントしてください。質問があれば、それも書きます。はじめの10分程度時間をとります。

4. 私はそれをみながら講義の内容を瞬時に判断して進めます。実は対面授業の場合はアクティブラーニング形式で行っていました。グループで読んできた箇所について意見を交換し合い、その後に全体で意見交換しながら内容を深めていきます。脱線することもありましたが、すべて本時の内容を深めるためには必要な脱線でした。

5. みなさんのコメントをみながら講義をします。講義には画面上に資料が現れますのでそれをみながら聞いてください。なお、みなさんのパソコン(スマホ)のZoom画面の音声をミュート(消音)にしておいてください。そうしないと、みなさんの近くの音などを全て拾ってしまいます。参加人数が多ければ多いほど雑音となります。発言する時のみミュートをoffにしてください。

6. 講義の主なトピック

(1)「知っている」から「できる」への英語学力観はどのようにして形成されたのでしょうか。そしてそれはどういうものなのでしょうか、何を意味するのでしょうか?

☞テキスト14頁, 16-17頁

☞小学校学習指導要領解説(外国語・外国語活動編) ☞学習指導要領総説3頁

☞「何が分かっているか」から「何ができるかへ」

(2) CEFR(セファールと読みます)はどのようにしてできたのでしょうか?そして、それはどのようなものなのでしょうか?日本の英語教育、とりわけ学習指導要領にどのような影響を与えたのでしょうか?

☞CEFR(Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching,

assessment)

☞欧州評議会(Council of Europe) が 2001 年に策定

☞学習者が何ができるようになるかを 6 つの段階で示している。

☞詳しくは <https://www.fourskills.jp/cefr>

☞大学入試に外部検定試験を導入する予定であったが上手くいかなかった理由は何だろうか？（時間があれば言及します）

(3) 学習指導要領における外国語・外国語活動の「見方・考え方」とはどんなものでしょうか？

☞学習指導要領解説（外国語活動・外国語編）5 頁， 11 頁

「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」とは、外国語によるコミュニケーションの中で、どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのかという、物事を捉える視点や考え方であり、「外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること」であると考えられる。

(4) 外国語コミュニケーション能力とはどのような要素で構成されているのでしょうか？

①言語能力， ②談話能力， ③社会言語能力， ④方略能力とはどんなものなのでしょうか？

☞コミュニケーション能力とは何かということについては、研究者の間でも長く議論されてきました。現在では、基本的に以下の 4 つの構成要素からできているという考え方が最も広く受け入れられています。

(1) 文法能力（文や文章を作り出す能力）

(2) 社会言語学的能力（発話の適切さを判断できる能力）

(3) 談話能力（文レベルではなく文章の構成に関わる能力）

(4) 方略的能力（語彙力などの不足等を補ってコミュニケーションを続けていく能力）

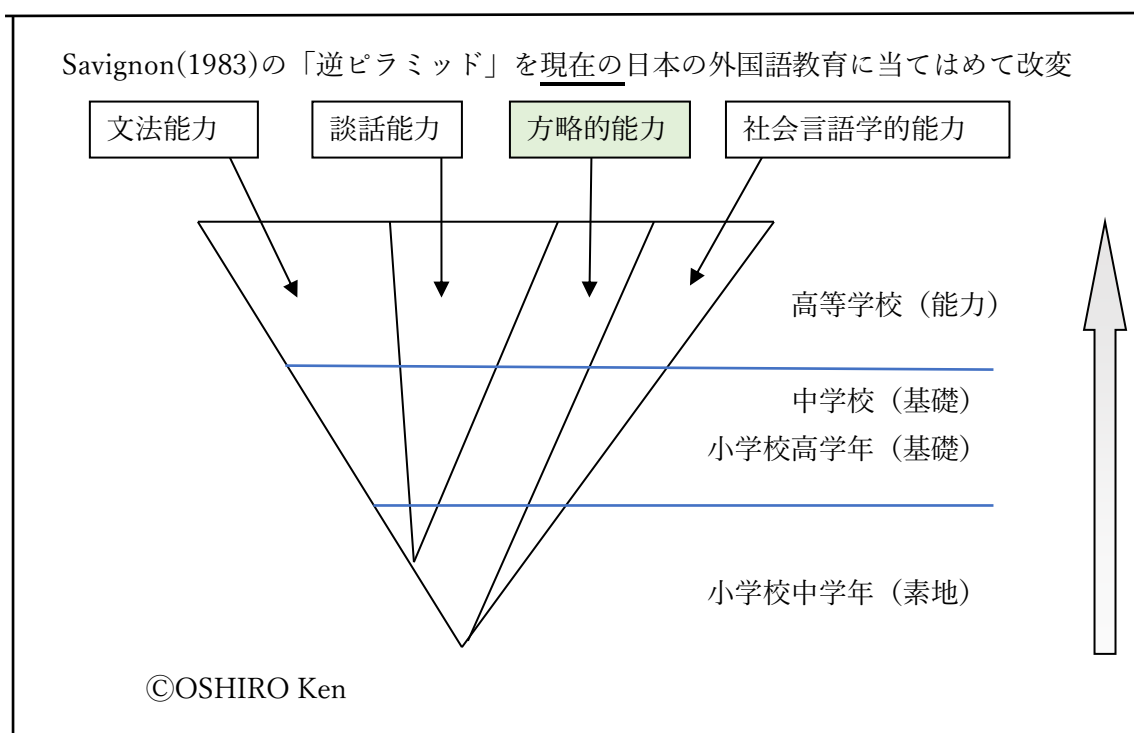
これまでの日本の英語教育で最も不足していた指導事項は、(4) の方略的能力ではなかったかと筆者（大城）は考えています。なぜなら、語彙や文法が分からないという理由で、コミュニケーションをあきらめてしまう学習者があまりにも多いことを目の当たりにしてきたからです。なぜこのようなことになったかという、これまでの日本の英語教育では、学習の初期の段階から文法・語彙が必要以上に重視されたために、方略的能力を使うチャンス

が失われてしまったからです。

Savignon(1983)は、(1) 文法能力, (2) 社会言語学的能力, (3) 談話能力, (4) 方略的能力の 4 つの構成要素は、学習の段階が進むにつれて、その割合が変化するものであるとコミュニケーション能力を「動的」に捉えています。そして、下の図（筆者 [大城] が日本の英語教育に合わせて一部改変）のような「逆さピラミッド」型で表しています。学習者は、はじめはピラミッドの先端（図2では下のほう）にいます。文法能力, 社会言語学的能力, 談話能力が皆無に近い状況です。あるのは方略的能力だけです。ですから、はじめの段階では方略的能力の占める割合が大きくなっています。

学習が進むにつれて（図2ではピラミッドの下の方から上に上がっていくにつれて）、文法能力やその他の能力の割合が大きくなっていきます。その結果、方略的能力の占める割合が小さくなります。

新しい学習指導要領の考え方は、まさに、この Savignon の考え方に依拠していると言っても過言ではないと筆者（大城）は考えています。実は、これが自然な学習プロセスなのです。今回の学習指導要領によって、「コミュニケーションを体験する」ということが文法・語彙を本格的に学ぶ前に行われることになったのは画期的なことです。その意義を十分に理解して学習段階に応じた言語活動、Small Talk を行うことが大切です。



(5) 教科用図書（教科書）はどのように作られているのでしょうか？どのような内容を盛り込むことになっているのでしょうか？

☞教科書 25 頁

⑦講義が終わりましたら、「リフレクションシート」を講義終了時間までに（10時20分までに）私のほうへメール添付で送ってください。「リフレクションシート」は様式がありますのでダウンロードして使ってください（下の「外国語活動Ⅰリフレクションシート」からダウンロードします）。皆さんから送られた「振り返りカード」を見てチェックしたのち、皆様にメール添付で返却します。当日中に返却されない場合は私のところに届いていない可能性がありますので私のほうへ問い合わせてください。もちろん評価の対象とします。